



一絨毛膜二羊膜双胎と二絨毛膜二羊膜双胎の一児発育不全(selective IUGR)における出生時NT-proBNP値の比較

藤岡, 一路 ; 田中, 聡 ; 岩谷, 壮太 ; 和田, 佳子 ; 坂井, 仁美 ; 溝渕, 雅巳 ; 芳本, 誠司 ; 中尾, 秀人

(Citation)

日本周産期・新生児医学会雑誌, 49(2):715-715

(Issue Date)

2013-06

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90002558>



O-412 一絨毛膜二羊膜双胎と二絨毛膜二羊膜双胎の一児 発育不全 (selective IUGR) における出生時 NT-proBNP 値 の比較

兵庫県立こども病院周産期医療センター新生児科

藤岡一路, 田中 聡, 岩谷壮太, 和田佳子,
坂井仁美, 溝渕雅巳, 芳本誠司, 中尾秀人

【背景】我々は前回の検討で, 一児が胎児発育不全 (selective IUGR: sIUGR) を呈するMD双胎 (MD-sIUGR) では, 出生時 NT-proBNP値が両児とも上昇することを示し, 胎盤血管吻合を介した双胎間血流不均衡が出生時心負荷に及ぼす影響を推察した。今回は, 胎盤血管吻合を有さない, 一児が胎児発育不全を呈するDD双胎 (DD-sIUGR) を対照として用い, 双胎間血流不均衡が出生時心負荷に及ぼす影響を検討した。

【目的】MD-sIUGRとDD-sIUGRの新生児において出生時NT-proBNP値を測定し比較検討すること。

【方法】2007年10月から2013年2月までに当院で出生した双胎のうち, 両児とも出生時NT-proBNP値を測定し得たMD双胎106組, DD双胎46組を対象とした。奇形症候群, 染色体異常は除外した。対象から, 小児の妊娠26週未満時点の推定体重が在胎週数平均の-10パーセントイル以下であり, QuinteroのTTTS診断基準を満たさないMD双胎 (MD-sIUGR群: 16組32例, 在胎週数中央値33週, 出生体重中央値1573g) とDD双胎 (DD-sIUGR群: 9組18例, 32週, 1273g) を抽出し, 出生時NT-proBNP値につき比較検討した。

【結果】MD-sIUGR群, DD-sIUGR群ともに大児と小児の出生時 NT-proBNP値に差を認めなかった。MD-sIUGR群の出生時 NT-proBNP値は, DD-sIUGR群より有意に高かった (4520 (529-62400) vs. 2115 (443-6590) pg/ml, $p = 0.038$)。

【結論】ともに一児発育不全を呈するMD-sIUGRとDD-sIUGRの比較において, MD-sIUGRの出生時心負荷がより大きかった。即ち, 胎盤血管吻合に起因する双胎間血流不均衡が, MD双胎のsIUGRにおける出生時心負荷に影響している可能性が示唆された。